インドネシア　　派遣期間　２０１２年４月～２０１５年３月

ジャカルタ日本人学校　帰国報告

北海道千歳高等支援学校
教　諭　中村　彩子

１．インドネシアの概要

（１）国名

インドネシア共和国
Republic of Indonesia

（２）地理

①総面積：約 190 万 4569 ㎢
（日本の約５倍強）

②島々は赤道をはさみ、東西 5100 ㎞・南北 1900㎞に渡って点在し、その数約 17000。

③『赤道にかけられたエメラルドの首飾り』と呼ばれるほど、豊富な地下資源と緑豊かな自然環境に恵まれた、世界最大の群島国家。

④熱帯気候に属し、年平均気温は 27℃。一年は雨季（4～10 月）と乾季（5～9 月）の二つに区別されている。

（３）人口・民族

①推定約 2.52 億人（世界第４位）

②人口分布は著しく不均等であり、ジャワ島、マドゥラ島に人口の約 61％が集中している。

③ジャカルタ市内の人口密度は高く、人口は約 1000 万人。

④約 300 の民族と、約 500 の言語・方言が同居する多民族国家。公用語はマレー語を母体としたインドネシア語。

（４）宗教

国民の約 90％はムスリム（イスラム教徒）である。国教はイスラム教ではなく、政府はキリスト教プロテスタント、同カトリック、ヒンズー教、仏教の５大宗教を国家公認の宗教と定めている。国民は、公認宗教のうちいずれかを選び、住民登録や国勢調査などの際に申告する。

（５）主な生活習慣

①左手は不浄とされているので、物の受け渡しや握手をするときは、必ず右手か、両手を使うようにする。

②頭は神聖な場所と考えられているので、宗教を問わず、頭を触れられることを嫌う。日本の感覚で、子どもの頭をなでたりしないようにする。

③インドネシア人は誇りが高く、人前で怒ること、怒られることを嫌うので、大声でどなったりせず、穏やかに応対する。

④インドネシアの人々は朝夕１日に２回、また儀式や祭礼の前、客をもてなす前にマンディ（水浴び）をする。ムスリム（イスラム教徒）は、一日５回お祈りをする。

⑤ムスリムは、豚は不浄なものとみなすので食べない。

⑥イスラム暦第９月に当たる『ラマダン』の約１か月間は、日の出から日没まで、いっさいの飲食をしない。

２．インドネシアの教育事情

（１）教育制度と特色

①日本と同じ６－３－３制。公立、私立、ボランティアで成り立つ学校など様々である。

②試験が年２回実施され、小学校から留年がある。

③公立は半日で終了し、土曜日は課外活動を行っているところが多い。

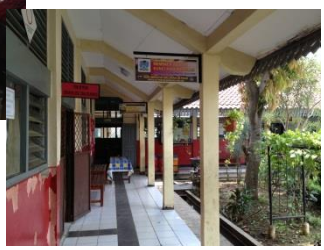
④愛国心や宗教を学ぶ時間がある。

⑤国際化を意識し、英語教育を進めている。

⑥曜日によって服装が替わる。

⑦休み時間には屋台でおやつが売られ、給食の代わりに食堂へ行く。

⑧貧富の差が激しく、学校へ通えない子どももたくさんいる。



３．ジャカルタ日本人学校
（Jakarta Japanese School：JJS）

（１）ジャカルタについて

インドネシア共和国の首都であり、政治・経済・文化・教育の中心地として、終日活気がみなぎっている。街にはとにかく人と車とオートバイが多く、『世界一の交通渋滞』が起こっている。

近代的なビルが林立し、広い道路を多くの車が走っているジャカルタ中心部であるが、一歩裏通りに入るとトタン屋根の家々が並び、裸足で歩く人も見かける。貧富の差が激しく、高級車に乗っている人もいれば、交差点で物乞いをしている人もいる。この国の光と影を凝縮した町である。

（２）学校の概要

①学校教育目標

『心豊かでたくましく、主体的に生きる子の育成を図る』

②児童生徒数（2014 年度）

全校児童生徒…1199 人

小学部…926 人

中学部…273 人

③学校の特色

小中学校が併設され、小中合同での教育活動が展開される特色を生かした取り組みを行っている。

＜通学と食事＞

児童生徒は約 60 台のスクールバス又は自家用車で通学している。ジャカルタは熱帯にあることや交通渋滞がひどいことから、朝早いうちに登校し、７時 20 分から始まる朝の活動に備える。給食はなく、全員がお弁当と水筒を持参する。また、朝早くに家を出るため、お腹の空いた児童生徒のために、２時間目と３時間目の間の休み時間には「中間食」を食べてもよいことになっている。

＜学習環境＞

校内には、小学部・中学部それぞれに、全面芝生の校庭と一年中泳げるプールがある。また、校舎の中庭は、小・中学部ともに、ガラス屋根のアトリウムになっていて、雨が降っても集会活動などができるようになっている。体育館もそれぞれにあり、中学部の体育館は、エアコンと観覧席が設置されている。こうした恵まれた環境は、校内で働く、笑顔いっぱいのインドネシア人のカリヤワン（用務員）たちが、いつも最高の状態に整備している。

（３）学校行事

①体育祭

小中合同で行われる年間２大行事の一つであ

る。小１から中３までの１２００人が５つの組に分かれて優勝を競う姿は圧巻である。伝統の「応援合戦」は、代々引き継がれてきたエールに、その年のオリジナルのセリフや動きが加えられ、毎年観客を楽しませてくれる。

②ＪＪＳフェスティバル

体育祭に続く２大行事の一つである。２日間に渡って行われ、１日目には、小学部は日頃の学習の成果を発表する「学習発表会」を、中学部は学級を単位とした「合唱コンクール」を行う。２日目には、「小中交流の部」として、小学部高学年と中学部が出店を開いたり、お神輿担ぎ、部活動・有志発表などを行ったりする。最後は全校生徒が一堂に会して、フィナーレの集いを行う。

（４）教育課程

学習内容は日本の小中学校と同じ教科の他、「総合的な学習の時間」や「英会話の時間」がある。「総合的な学習の時間」には、インドネシア語の学習をはじめ、インドネシアのことを理解するために自分たちで様々なことを調べたり、現地の学校と交流活動をしたりしている。

インドネシアの文化に触れることに重きをおいており、中学生が参加する「日本インドネシア友好親善スクール」は、20 年以上の伝統をもっている。その他、部活動の親善試合、各学年の社会見学、バリ島への修学旅行などを行っている。

（５）特色ある教育活動

①国際理解教育

インドネシアの文化、伝統、自然などについての学習活動を実施している。インドネシアの諸民族の衣装を着てみる体験や、博物館などの見学、珍しい植物や動物、昆虫についての学習、インドネシア楽器の演奏等、様々な学習活動を行っている。また、インドネシアの伝統文化について学習をしているサークル「ヘリテイジ」を講師として迎え、各学年の発達段階に合わせた体験型の授業も行っている。

②外国語会話

英会話の授業は小学校１年生から中学校３年生まで行う。学習段階に応じて、初めて英語に接する児童のための初級から上級までいくつかのクラスに分かれている。ネイティブの教師６名と、補助の教師２名が担当し、授業は英語のみで行う。

また、インドネシア語の授業も生活科や総合的な学習の時間に実施しており、インドネシア人の教師５名が担当している。インドネシアに滞在が長い児童生徒は、とても上手に話すことができる。

③日本語教室

幼少期からインドネシアに滞在して、その期間が長い児童生徒のなかには、日本語の習得が十分でない子どもたちもいる。そうした子どもたちのために、小学部低学年を中心として希望制で日本語の補習教室を開いている。週に１回ずつ、放課後に授業を行い、漢字やひらがなの学習、読みの練習など様々な教材を使って日本語を学んでいる。

④通級学級

知的障がいや発達障がいのある子どもたちのために、通級指導学級がある。普段は自分の学級で授業を受け、個別指導が必要な学習の時間に通級教室に来て、学習指導を受け

ている。児童生徒数が増加するに伴い、特別な支援を必要とする子どもの転入学が増えてきている。

⑤部活動

原則として火曜日・木曜日の放課後に実施しており、活動時間は１時間となっている。参加は希望制で、小５から中３までの児童生徒を対象としている。バスケットボール、陸上、バドミントン、ダンス、和太鼓、美術など１４の部活動を実施している。

４．インドネシアの暮らしとＪＪＳ

インドネシアという国に３年間暮らす中では、様々な出来事があり、本当に多くのことに心を動かされました。最後に、インドネシアの４つの言葉から、私が感じたことを述べたいと思います。

（１）tidak apa-apa（ティダ・アパアパ）

「問題ないよ」という意味のこの言葉。生活の中では、何度も何度もこの言葉を耳にしました。ジャカルタのような大混雑の街においても、人々が歩くスピードは、こちらが焦るのをよそに、のんびり、ゆったり。この「のんびり・ゆったり」にも限度があると思うときでも、いつでも、インドネシアの人々は焦らず。そして、何かが起こったときにも、私が失敗をしてしまったときにも「tidak apa-apa！」と笑顔で返してくれました。一年中温暖な気候の中で、のんびりと暮らす彼らの姿に、心にゆとりを持って生きることの幸せについて考えさせられる場面が何度もありました。

（２）Olang Jepang（オラン・ジュパン）

インドネシア語で「日本人」を意味する言葉です。インドネシアの人々の「ゆとり」に心を動かされる一方で、月日が経つに連れて感じた日本という国の素晴らしさ。豊かな自然と、時には厳しい寒さのある四季の中で育った日本人だからこそできる、日本語の繊細な表現や、産み出すものの丁寧さ、そして奥ゆかしさ。私たちにしかできないことや感じられないことがあるのではないかと再確認できたことは、今後の人生に大きなヒントをもらうことができました。

（３）sama-sama（サマ・サマ）

インドネシアで、よく聞いた言葉の一つに「sama-sama」という言葉があります。「どういたしまして」という意味を持っています。日本では、「ありがとう」は頻繁でも、「どういたしまして」が会話の中で繰り返されることはそれほど多くはないのではないかと思います。インドネシアでは、「ありがとう」と言われたことを大切に受け止め、素直に相手に返すことができます。お互いの行いをお互いが受け止め、認め合っているからこそ、交わされる言葉なのではないかと思います。

日本では、思っていても伝えられない言葉がたくさんあるように思います。インドネシアの人々の豊かな感受性を取り入れて、大切な思いを素直に伝えられる人間になりたいと思いました。

（４）Bagus! （バグース！）

「素晴らしい！」。JJS では、日本全国から集まったたくさんの先生方に出逢い、大切なことを教えていただきました。特に、同じ年にＪＪＳに赴任した先生たちとは、仲間として、皆で仕事や生活の悩みを分かち合い、お互いに励まし合いながら３年間を過ごしました。こんな素晴らしいチームで仕事ができることはもうないだろうと思うくらいです。出身や経歴などから判断するのではなく、ここに集まった今のお互いを知ろうと努力すること、そして良さを認め合うこと。そこから素晴らしい力が生まれることを改めて実感しました。帰国後も、出逢った子どもたちと保護者の皆様、そして仲間たちとつながりを持つことができ、今の生活に背中を押していただいています。この素晴らしい出逢いのチャンスを与えてくださったすべての方々と、かけがえのない３年間に心より感謝申し上げます。